

令和7年度(2025)年度 日本体育大学 大学院 入学式 (研究科長代表式辞)

本日入学された皆様、日本体育大学大学院へのご入学、誠におめでとうございます。体育学研究科、教育学研究科、保健医療学研究科を代表しまして、お祝い申し上げます。また、これまで新入生の方々を支えてこられたご家族、関係者の皆様方にも、心からお喜び申し上げます。

みなさんが入学された本学の大学院は昭和50年1975年に体育学の修士課程が設置されたことから歴史が始まります。平成10年1998年に体育科学研究科として博士課程が設置され、現在は3研究科に修士号、博士号を授与できる課程を擁する大学院に発展し、身体にまつわる諸問題を扱う、我が国を代表する研究拠点になっています。

大学院は高度な学術を創出する研究機関であると同時に、そのための教育機関です。教育機関としての大学院にて、皆さんはこれから研究指導を受けることになります。大学院での教育は、学部よりも教員との関係性が深く、それはたとえば、昔から師弟関係といわれてきました。

その師弟関係の中で、よく私たち教師の側は教えるのが難しいということを言います。しかし、大学院で本当に難しいのは、教えるよりも教わることです。大学院では、自分で求めないと十分に指導教員から教わることはできません。また反対に教わりすぎても、良い研究になりません。大学院は自分が主体です。教えてもらう側は、自分の目指す研究の成就に向けて、教師を自分の色に染めつつ教えてもらわなければならないのです。大学院で成立する、教える一教えられる関係は、教師からの一方的なものではなく、まさに双方向の関係によって成立するものです。その関係の中で、皆さんに求められるのは、教師を信じ、同時に教師の考えに場合によっては疑問を持ち、教師から専門性をすべて引き出し、それらを自分の中で取捨選択し、自分の研究テーマに反映させて行くことです。このような矛盾することがらを自分の中で自分の判断でおこなわなければなりません。大学院は院生が主体であるとは、このようなことなのです。

教わることは難しい、これは私が身をもって経験していることです。今は亡き恩師に、もっといろいろなことを聞いておけばよかったとか、先生は本当は違うことを自分に伝えたかったのではないか、それらに気づいていたら、もっとよい論文が書けていたのではないかなど、恩師から違う教わり方があった可能性を、今も思い返しています。皆さんには、この場で、教わることの難しさをまずお伝えし、悔いなく大学院の教育を受けていただきたいと思います。

今日から皆さんは、学問研究という厳しくそびえたつ山々に分け入っていくことになります。これから刻苦研鑽の道が始まるわけです。学問という険しい峰々がそびえたつ中、未だ、だれも発見していないルートを探りつつ進むのが、学問・研究の道です。時には苦しむこともあるかと思えます。

しかし、学問研究の道は、苦しいだけではありません。そこには、学問研究を志したからこそ、味わえる喜びがあります。まだ誰も気づいていない問題に遭遇した時の胸の高まり、考えることの楽しさ、同じ悩みを共有する研究仲間との連帯感、わからなかった問題を解いた時の喜びなど、学問研究の山に登ることは苦しみと同じか、それ以上の喜びと美しさに満ちています。これまで多くの偉大な学者が学問の山に分け入り、隠れたる真理発見のルートに挑んできました。皆さんは体育学・教育学・保健医療学のそれぞれの専門分野で学問の山に分け入るのです。

本日の式辞の最後に、学問研究の偉大な先人であり、かつてノーベル物理学賞を受賞された量子力学の朝永振一郎博士の言葉をお送りします。その言葉は、先ほど申し上げました教わる態度のヒントになります。

「ふしぎだと思ふこと　これが科学の芽です

よく観察してたしかめ　そして考えること

これが科学の茎です

そして最後になぞがとける

これが科学の花です」

真理探究に向かう前途有望なみなさんが、この大学院で、充実した研究生活を送られ、研究の花を得る喜びをつかめますよう、研究科を代表して祈念し、式辞といたします。

令和7年4月3日

日本体育大学大学院 研究科長代表 関根正美